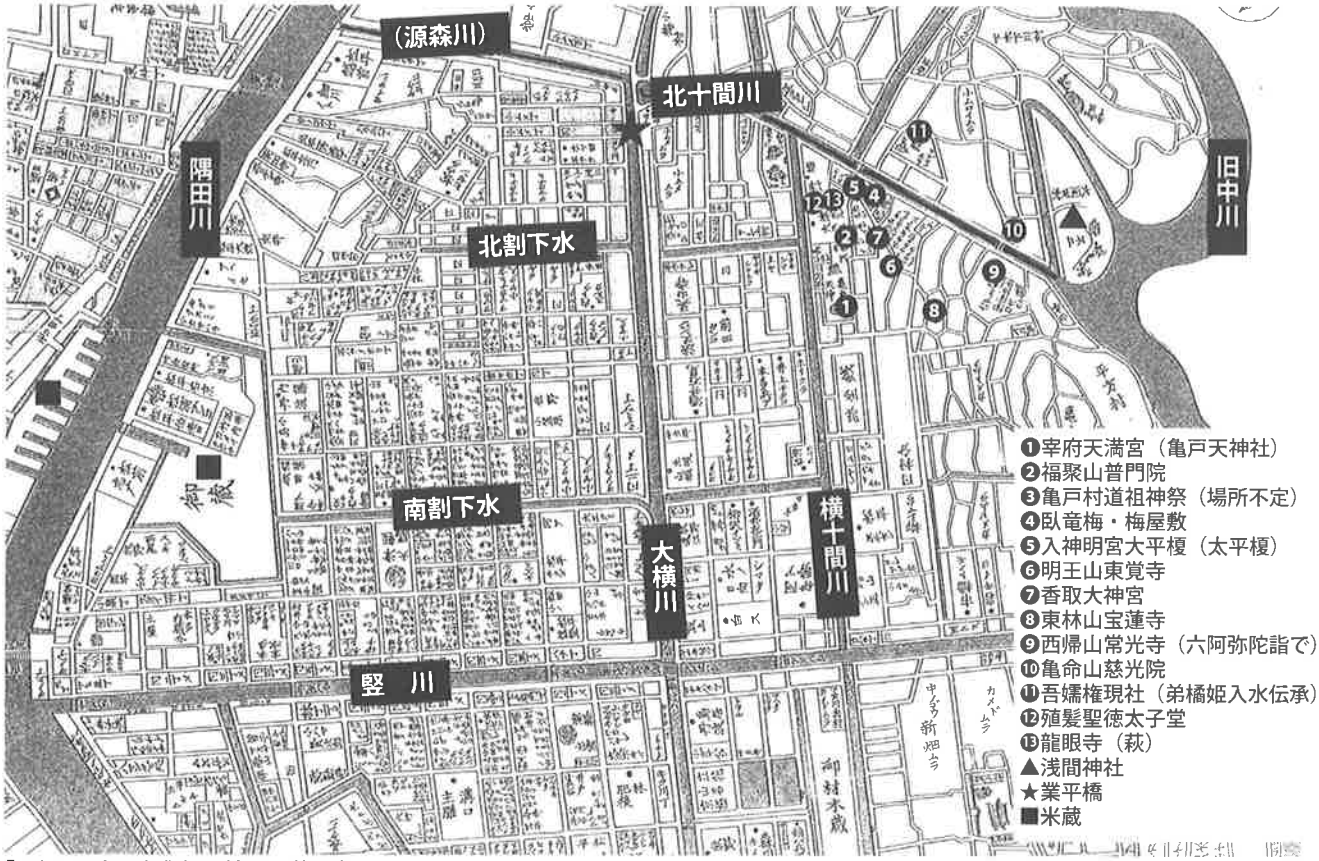
資料館ノート　第71号　　平成19年9月16日発行

江東の掘割・川　③

北十間川 ―海岸線の記憶と本所の開発―

江東区深川江戸資料館



「天保一四年天保御江戸絵図」（部分）

今回は、江戸時代、本所地域の開発に伴い開削された掘割の中から、北十間川を取り上げます。

（1）北十間川とは

隅田川と旧中川とをつなぐ延長約３キロメートルの掘割。途中、大横川、横十間川を分岐し、北西から南東へと斜めに流れています。一部江東区と墨田区の区境になっています。本所の北部かつ横十間川の北に位置し、川幅が十間（約18m）あることから北十間川と呼ばれました。万治２年(1659)に本所の開発に伴い開削された掘割の一つです。輸送路や農業用水など多目的に使われてきました。現在の川筋は隅田川に接続していますが、明治18年(1885)までは業平橋の東側に土手があり、隅田川・大横川とは連絡していませんでした。因みに隅田川から業平橋までは、寛文３年(1663)に材木輸送の目的で開削され、源森川と呼ばれていました。水運の衰退とともに現在はその役割をおえ、静かな水面は散策や魚釣りをする憩いの空間として人々に親しまれています。

（2）掘割以前

江東区などを含む東京低地の陸化は平安時代頃にはほぼ整ったとされています。江戸時代以降、埋め立てられて掘割が開削される以前、北十間川より南側は遠浅の海にいくつもの島が点在するような地形だったと考えられています。それまでの海岸線は、北十間川から亀戸の辺りだったわけです。記録や伝承上にみられる大嶋・亀津島・牛島という地名はその時代の状態を表わしていると言えます。北十間川が海岸線に位置していた頃の水辺の記憶を探ってみましょう。

《弥生式土埵と入神明宮》　入神明宮（亀戸３－41）から出土した管状の土製品です。『江戸名所図会』に「相伝ふ、上古この地は一つの小島にして、その繞りは海面なりしと」と記されるように、入神明宮は大平塚（太平塚）とも呼ばれるような小島になっていたようです。また、同書には「往古はこの地、船多く泊まるところなるゆゑに、入りと唱へしをもて、いまも古きを失はずしてこの地字に呼ぶといふ」とも伝えています。そして同地にあった網干し榎という神木について「昔この辺ひとつづきの海なしり頃、漁者の網を懸け干した

るゆゑに」名付けられたと説明しています。

《寺社創建伝承》 江東区内でも北十間川沿岸にあたる地域は中世とそれ以前に創建の由来をもつ寺社が集中しています。このことは亀戸が江東区内で資料から確認のできる江戸時代よりはるか昔からの村落であることとも一致しています。水辺に関する伝承を持つ社寺の例をあげてみます。

●香取神社（地図❼）天智天皇４年 (665) 創立。藤原鎌足が東国下向の際、現亀戸附近にあった島に船を寄せて旅の安泰を祈願した。

●吾嬬神社（地図⓫）日本武尊の東征の際、海神を鎮めるために入水した弟橘姫の衣が流れ着いた。

●浅間神社（地図▲）同じく、弟橘姫の笄が漂着。

●常光寺（地図❾）隅田川に身を投げた足立姫を供養するため熊野灘から父親の流した霊木（現足立区熊の木に漂着）で行基がつくった阿弥陀仏を祭祀。

（３）本所の開発と掘割の機能 ～排水路・名所～

このように近世以前からの歴史を持つ後の北十間川沿岸に当たる地域は、本格的な掘割として開削される以前から、すでに隅田川の旧流路が形成されていたとも言われています。そして明暦３年 (1657) の明暦の大火をきっかけに本所・深川地域の再開発が進みます。万治２年 (1659) 頃には、竪川・大横川・横十間川・北十間川・六間堀・割下水などの水路網が整備されました。そして、北十間川は他の水路とともに主に干拓地の排水路として機能してきました。また船による輸送が主流だった時代までは様々な物資・人を乗せる船が行き交う運河でもありました。『東京府志料』の「〔舟筏〕茶船五艘　傳馬茶船四艘　肥船十艘　網船二艘　釣船二艘　荷足船一艘　雑魚取田船二十一艘　水船一艘」という記述からは往時の姿をうかがうことができます。

ところでこの北十間川沿いは、先に述べたように、もともと由緒あるお寺や神社が点在する地域だったため、江戸時代、開発が進み江戸市中との行き来が容易になると、名所としても注目されました。社寺を訪れる人々を運び、船や川沿いを行く人々の眼を楽しませたのが北十間川の流れと景色でした。江戸の町中とは異なる風情を味わいながらの散策や参詣は、当時の人々にとって人気があったことでしょう。

人々はどのような名所を訪れていたのでしょうか。参考までに、名所案内記の集大成とも言える『江戸名所図会』で取り上げられている名所のうち江東区内を中心にあげると地図❶～⓭のようになります。

十方庵大浄敬順は、江戸近郊の探訪を記録した著書『遊歴雑記』の中で、これらの名所について次のように記しています。

●柳島龍眼寺の萩見（三編巻之上第十七）地図⓭

（略）彼翁（龍眼寺で出会った翁）は是より吾妻の森（地図⓫）より木下川の薬師にあそぶよし同道し侍らん、帰路遅くば御宿申さんなど最念頃にして深切なれど、予（著者敬順）は亀戸天神（地図❶）より香取の宮（地図❼）又回向院なる甲府善光寺の開帳へ罷らんとこゝろざしぬれば、再会を期して南北へ立別れぬ、彼叟の宿所薬研堀とは聞（聞）しが名を忘却して甚残多し、（略）萩の頃は都の男女集ひ来りて僧房に宴を設くるあり、花下に興ずる茶店に憩ふ、花招かざれども千里駕を命じ貴賤爰に来り雅客庭前に逍遊す、凡小日向よりは一里半には遠からんかし、

●本所亀井戸天満自在天神（初編巻之中第六十一）地図❶

（略）門前には、調理をひさぐ酒楼食店軒を並べ、亭宅を巧みに作り、各少婦新粧を凝し媚けば、飄客うかれぞめきて宴を披きて楽めり、此地蜆汁を名産とし、業平蜆の名尤高し、是業平橋（地図★）の川筋にて取が故也、但世の人在原の業平朝臣の事よと思へり、全左にあらず、（略）是は日ゝ俵物の舟何百艘となく大川より横堀へ漕入て納米を御蔵（地図■）へ積入、又御倉より舟へ積込て漕出すも有、其度ゝ俵より溢れて河中へ沈没す、此米を平生に食して生立がゆへに、此川の蜆は貝一盃に肥て風味抜群せり、

●亀戸村東覚寺郎弁不動尊（三編巻之上第十八）地図❻

（略）川より明王堂まで道敷の左右には、奉納の幟も数多見ゆ

いずれも土地の風物を求める人々の様がみてとれますが、良質の蜆の理由に幕府の米蔵から出入りする船の米を理由にあげていることなど、輸送路としての河川が身近にあったころの感覚が表れており面白いです。また東覚寺の幟が川（恐らく北十間川）から立ち並んでいるというのも参詣ルートなどを考える点で興味深い記録です。

（４）護岸の整備

かつての北十間川は人工の河川、運河とは言え、水害のたびに流れを変える自然に近い流れでした（絵参照）。明治 43 年 (1910) の洪水後、現在のように護岸が整備されました。以前の北十間川を知る近所の方の中には、護岸が造られることにより江東区と墨田区という区境の感覚が深まり、対岸との精神的な距離感を感じるという方もいます。それまでは、亀戸村としての一体感が残っていたのかもしれません。

「新撰東京名所図会」東京都公文書館所蔵
（『江東区の文化財』より）